

【調査報告】

沖ノ島祭祀遺跡学術調査聞取報告

岡寺 未幾 福岡県九州国立博物館・世界遺産室

要旨: 世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会では、令和元年度からデジタル・アーカイブ MUNAKATA ARCHIVES を構築し、本遺産群に関わる文化財や関連する資料のデジタル化を進めている。その一環として、沖ノ島祭祀遺跡の学術調査、特に第1・2次調査にかかる写真フィルムのデジタル化作業を行っている。令和2年度に、この写真データについて、沖ノ島の3次にわたる学術調査全てに参加した小田富士雄氏から聞き取り調査を行った。沖ノ島の発掘調査が行われた当時の島内の様子や、調査の状況を伝える貴重な証言と考え、ここで報告する。

キーワード: 沖ノ島、祭祀遺跡、自然崇拜、古墳群

1. 調査の概要

世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会では、令和元年度から本遺産群にかかるデジタル・アーカイブ MUNAKATA ARCHIVES を構築し、本遺産群に関わる文化財および関連資料のデジタル化を進めている。その一環として、令和元年度から5年度まで、昭和29（1954）年から昭和47（1972）年にかけて行われた沖ノ島祭祀遺跡学術調査にかかる写真のデジタル化を行った。本事業の成果については既に MUNAKATA ARCHIVES で公開されている⁽¹⁾。

第1・2次調査にかかる写真のデジタル化に着手した令和2（2020）年12月9日に、沖ノ島の三次の学術調査全てに参加した小田富士雄氏から聞き取り調査を行った。沖ノ島の発掘調査が行われた当時の島内の様子や、調査の状況を伝える貴重かつ重要な

証言であり、書き起こしの形で報告する。

小田富士雄先生 沖ノ島学術調査 聞取調査

日時：令和2年12月9日

会場：九州歴史資料館研修室

参加者：

福岡県世界遺産室 岡寺 未幾

九州歴史資料館 伊崎 俊秋

宗像市文化財課 原 俊一

宗像市世界遺産課 合島 賢二・岡 崇

宗像大社 福嶋 真貴子

株式会社とっぺん 田中 健一郎・宮田 慶彦

2 聞き取り調査の内容

（1）デジタル化の経緯

岡寺：本日は、令和元年度から進めている沖ノ島の調査にまつわる写真をデジタル化した資料を見てい



写真1 聞取調査の様子



写真2 小田富士雄先生

ただき、小田先生からコメントをいただこうと思います。

今回の経緯は、「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群を世界遺産に登録推薦する時、第1次・2次調査に関する写真がなく困ったという話を小田先生にした際、片山写真館を訪ねてくださいとお話しいただきました。その片山写真館が平成31（2019）年3月に閉館することになりました。

片山撰三さんは、とくに肖像写真で著名な写真家ですが、仏教美術をはじめとして、芸術・文化財に造詣が深く、九州の文化財に関わる写真も多く撮影されています。沖ノ島では、第一次調査に参加し、発掘調査の報告書『沖ノ島』、『続 沖ノ島』、『宗像神社史』の写真図版を担当しています。

福岡県立美術館は平成29（2017）年に特別展「写真家 片山撰三 肖像写真の軌跡」を開催したことから、片山写真館と強いつながりを持たれており、写真館に残る片山撰三さんが撮影された写真の調査を福岡県で実施させていただくことになりました。調査に参加したのは福岡県立美術館魚里洋一副館長、岡部るい、九州歴史資料館松川博一、井形進、福岡県世界遺産室岡寺未幾、松本将一郎の5名です。この調査で、沖ノ島の第一次調査の写真や九州の文化財にかかる大変貴重な写真が残されていたことがわかりました。当初写真は全て東京のフィルムセンターに寄贈予定だったのですが、所有者の片山敬子さん、(株)片山写真館 代表取締役 飯田章人さんに御報告したところ、文化財にかかる写真については、福岡県へ寄贈いただけることになりました。これらの資料は現在、九州歴史資料館に所蔵されています。

ちょうど福岡県世界遺産室では令和元年度から文化庁の補助事業でデジタルアーカイブ事業を行っていたことから、片山写真館から寄贈いただいた宗像関係の資料のデジタル化を行うことになりました（岡寺2020）。

その成果を宗像大社へ報告したところ、宗像大社神宝館が保管する黒い箱からも、沖ノ島の発掘調査時のカラースライドが見つかりました。詳細を調べたところ、こちらも片山撰三写場が撮影した第1次調査のものである事がわかりました。

神宝館に残る沖ノ島の第3次調査の写真も宗像市文化財課の原俊一さんが整理を行われていたことから、1次のカラースライドと3次調査写真のデジタル化をあわせて行うことになりました。

令和2年現在、デジタル化した写真資料は3000点ほどです。宗像大社神宝館にある沖ノ島関係の写真は20000点を超えるので、まだごく一部ですが、沖ノ島に関わる非常に重要な資料だと思います。

今回の聞き取りでは第1次の第1回と第2回の写真を中心にみていただこうと思っています。なお、第3次調査の写真も時間が許せばコメントをいただくためにあわせて、ご用意しています。

（2）第1次調査の参加者

岡寺：これは昭和29年5月29日沖ノ島へ向かうという写真です。神風丸という県の巡視船と別の船と二手に分かれて沖ノ島へ行ったようです（写真3）。

小田：第1次調査の第1回目の調査は、考古班は1～2日遅れて出発したんですよ。その前に本隊の（出光）泰亮さんたちが来ていましてね。九州大学のほうで学会などがあって、鏡山先生と松岡君と私とが遅れて出発したんですよ。それで向こうについて5月の30日かな、5月の終わりに最初に渡った本隊の人たちが帰っていきますけどね。我々はそれからもうちょっと残って調査したわけですが、その時に台風が来て遅れて、帰ってきたのは6月の4日でしたか。その間に暇になりましたので本調査の予備でどういう状況か見てみよう。7号遺跡に向かって左、灯台に上る道が続いているところでトレンチを一箇所入れましたら、新羅の関係の馬具だとか金製の指輪を掘り当てた次第です。沖ノ島の調査は不思議にですね、金製品と何か縁がある。

これはですね、第1次第2回調査の時の写真ですね（写真4）。最前列右から2人目が斎藤忠さん、立っている麦藁帽の方の左は京都大学の水野清一さん、最前列左から4人目が鏡山猛先生、その右が熊本の坂本経堯先生です。第1次の2回目の調査は8月で、当時斎藤忠さんと東博の三木文雄さんが客員ということになっておったのですが、水野清一さんや森貞次郎さんなど、東亜考古学会で壱岐の調査をやった



写真3 船上から沖ノ島をみる (1954)

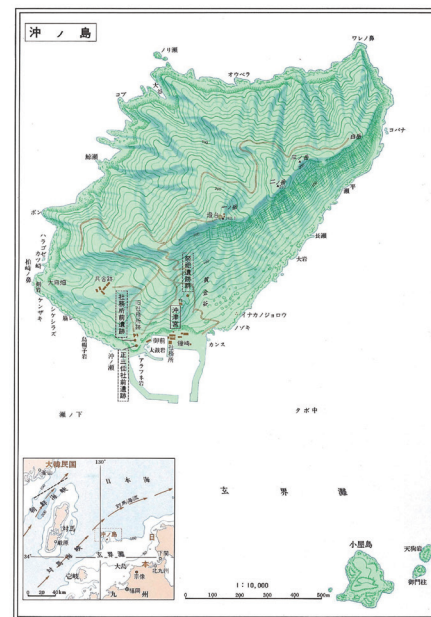


図1 第3次調査時の沖ノ島
(旧社務所が第1次調査時の社務所)

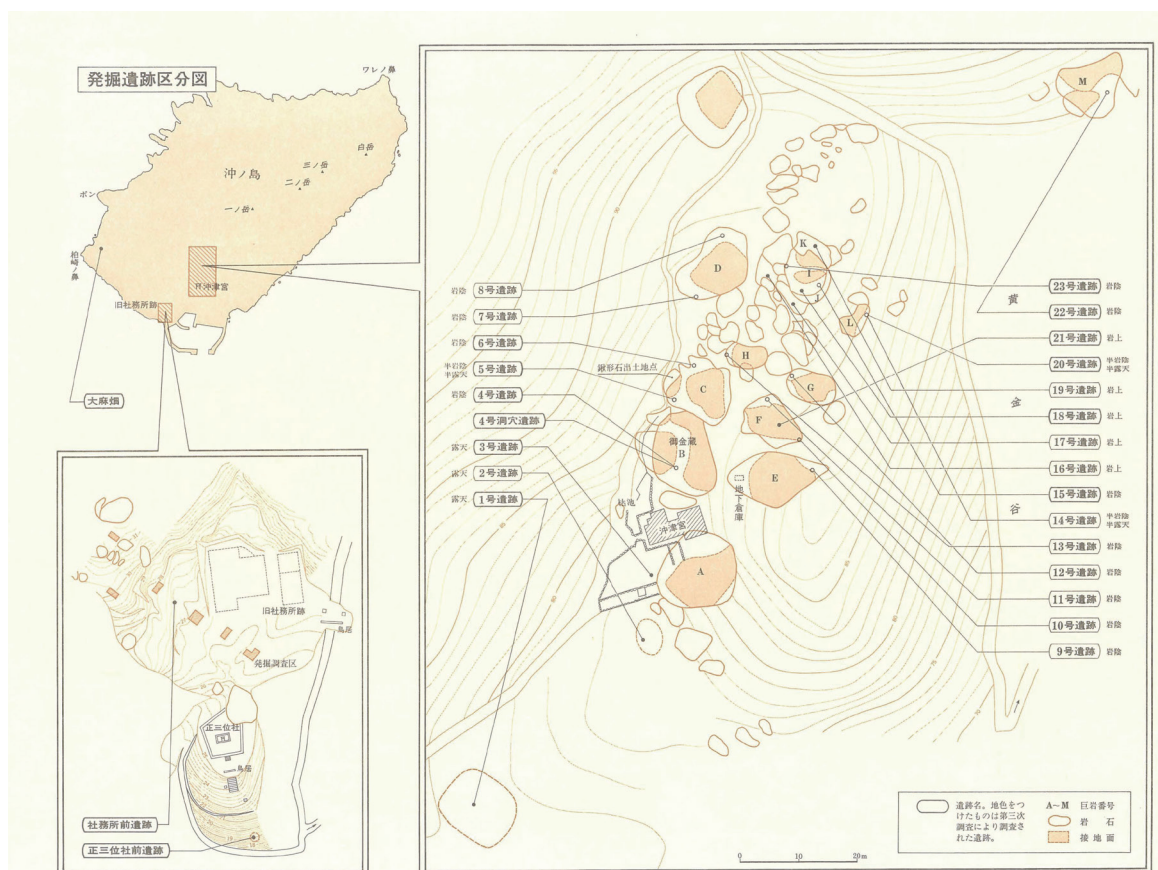


図2 発掘遺跡区分図 (第3次調査当時、※現在旧社務所・正三位社前遺跡は崩落により消失)



写真4 第1次調査第2回調査参加者① (1954.5)



写真5 第1次調査第2回調査参加者② (1954.5)



写真6 沖津宮社殿 (1954.5.30)



写真7 8号遺跡 (左)・7号遺跡 (右) (1954.5)

帰りにここに寄られたのです。この写真の前列の座っている左側から二人目が片山撰三さん、その左の野口さんは片山さんの助手です。左から三人目に座っている人が京都大学の高橋猪之介さんで京大の考古学関係の写真をほとんど一手に引き受けておられた方です、それからその右の座っている方が田中忠さん。松岡君の一年後輩で佐賀大の学生です。その右が鏡山先生、さらにその右が坂本先生、その右で椅子に座っているのが出光泰亮さん。その右側が斎藤忠さん。その右側の前列に座っているのが武藤正行さん、当時修猷館高校の先生をしてもらって、沖ノ島の調査を持ってくるために、出光さんあたりとかなり折衝交渉をされて、調査の一番の原動力になった方で、のちに福岡県文化課へ入られた⁽²⁾。それから後列に立って一番左側におられるのが波多江一俊さん。筑紫豊さんが神道代表で、波多江さんが仏教代表ということで。その右側が吉田聖さん、毎日新聞社の記者の方で考古学関係の記事では九州ではなかなかの人です。その右の角帽かぶっている人は松岡史君。その右が水野清一さん。角帽かぶっているのが私、その右側に立っているのが東京国立博物館の三木文雄さん。その右側に角帽かぶっているのが宮崎大学の諏訪昭千代君ですね。のちに鹿児島県文化財の係長になって、もう亡くなられましたけれど。その右側の白い帽子をかぶっている人は森貞次郎さんです。それからその右側が渡辺正気さん。その右に一番上が神戸さんという宗像の神主さんでいろいろと我々の世話をしてくれた方です。その前に原田大六さん。一番前が武藤正行さんです、それから右端が佐藤市五郎さんの息子の千里さん。

社務所（図1に記載されている旧社務所のことを指す⁽³⁾）の前の断崖絶壁になるところにこういう岩場がありまして、みなさん朝晩よくここに出てきて景色を眺めていたところです。たしか鏡山さんがつけた名前が九州のあちこちが見えるので「望郷の岩」という名前をこの岩につけてましてですね。それで朝晩良く眺めておったのですが。

これは7号遺跡の前で撮った写真で第1次の第2回ですね（写真5）。手前に座っている方が左から佐藤千里さん、それから坂本先生、それから鏡山先

生、それからその右が武藤正行さん、それから渡辺正気さん、それから後ろに立っている方が一番左が宮崎大の諏訪昭千代さん、その右が私です。それからポール持って立っているのが原田大六さん、それから波多江一俊さん、角帽かぶっているのが松岡史君、それと田中忠さん。右端が三木文雄さん。というような顔ぶれです。

岡崎：調査は5月29日に船が出て沖ノ島に到着し、九州考古学会の考古班は後から合流するのですが、調査日誌では嵐で帰れなくなった話がありました。ヤマドリという海上保安庁の船が昼くらいに来るけど乗船できず船はそのまま引き返して、やむなく滞在したところ、社務所の西側に縄文・弥生の土器片が散在していることが分かって遺跡を見つけた、となっています。もともと、第1回調査は4号遺跡だけを目的としていたようですね。

（3）4号遺跡

小田：4号遺跡は（沖津宮）社殿（写真6）の向ってすぐ左側にある洞穴でしてね、御金蔵（おかなぐら）と言われていたところです。近世・近代までのいろんな奉納品があるとみんなこの御金蔵に持って行って入れておいたのですね。昔から「御金蔵」って名称だけが非常によく知られておったのです。3次調査の折に御金蔵の中を掘りましたら、その時に新羅系の馬具などが発見されて、4号遺跡という名前を付けました。遺跡自体が洞穴になっていますが、祭祀遺跡です。さらにその下の層に、縄文の層が出たのです。最初は縄文時代の生活の遺跡として、おそらく台風か何かで上陸して短期間だけ住んだ。この遺跡で縄文から弥生、古墳時代の土師器まで出ますけれども、つながらないんですよ。間が途切れておりますから、たぶん台風か何かに遭うと皆ここに逃げ込んで来たのですね。我々の調査中でもそうで、皆ここに避難してくるわけです。そういうようなことで、短期間だけ滞在した時期があった後、祭祀遺跡になって、さらに中世近世以降には御金蔵という形で、奉納品を納めるという利用の仕方をされておったのです。この御金蔵の後ろ側が、第5号遺跡になります。



写真8 7号遺跡 (1954.5)



写真9 5号遺跡 (1969)

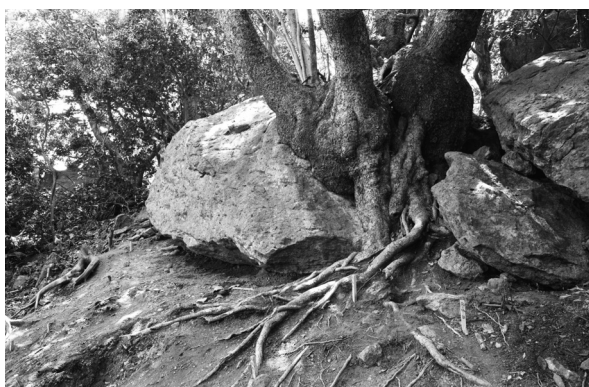


写真10 20号遺跡 (1970.5)



写真11 正三位社 (1954.5)



写真12 休憩のひととき (1954.5)



写真13 三岩礁と船 (1954.5)



写真14 沖ノ島港湾 (1954.5)



写真15 沖ノ島港湾工事 (1954.5)

我々は先ほど言いましたように結局台風で帰れなくなりまして、当初は5月の終わりか6月の初めに帰る予定で、海上保安庁の船が（迎えに）来たんです。当時海上保安庁の船は戦時中の駆逐艦を改造した船になっておりまして、あれで帰ると2時間くらいで帰れるわけですよ。我々は漁船で往復しましたから、漁船で行くと片道が3時間半～4時間かかっていたんですよ。ある時期に我々も漁船に乗っていききました。台風前にはもう波が逆立ってますから、船が波の頭に乗ったときは沖ノ島の灯がちらっと見えるんですけども、その次には波の底へ船が引きずりこまれるような、どっちを向いても波の頭が見えてるような、そんな状態で、行ったこともありました。

我々が最初、帰れなくなった時も、簡単に帰れると思っていたんで、予備の食料の用意をしないで、当時、植物関係の先生がおりましたから、天然記念物になっているんで本当はいかんですけれども、食える草を探して来いというのでいろんな草を持って帰っては植物の先生に「食べられますか？食べられませんか？」というようなことも聞いたり。それから、夜になると、例のオガチが鳴くわけですよ。赤ん坊の泣くような声を出します。佐藤千里さんたちが、オガチ（オオミズナギドリ）を食うんだと言い出して、オガチを2～3羽捕まえてきて、食料にするんだということで。あれは本当は1週間くらい油抜きをせにゃいかんだそうですけどもね、獲って帰って翌日食わされたんですよ。前の晩にくくって庭に置いときますと、ぎゃーぎゃー鳴くんですよ。武藤さんなどが「明日のおかずが鳴いとる」とか言ったんですけどもね。そんなことがあって翌日のみそ汁の中に入れて食わされました。食べたもんじゃないですね、油がいっぱい浮いてですね。あれは本当は油抜きをせんといかんです。

（4）7号遺跡（写真7・8）

小田：そんなことがあって、じつとしくのもなんだから、次の本調査に備えて、探りを入れてみるかというので、7号遺跡の端っこの方にトレンチを入れましたら偶然、新羅系の馬具類のある所に当たり

まして。金製指輪も掘りましたね。

それで、社務所まで持って下りましたら、当時、前田さんという神職さんがおりましたが、「先生これは古いんですか？」と尋ねられたので、「古いものですよ。」と答えたら、実はあそこは横が登山道になっていて、灯台に登る道で、雨が降るたびに7号の端っこの方の土が流れるんです。それで新羅の馬具とかが出て、灯台に上る人が見つけ出して、神社にことずけていったらしいんですね。それでこれらはあの灯台に上る方々が採取して持って来たのですよって、前田さんがバケツに馬具を入れてガラガラいわせて持ってきたんです。だからあの7号の新羅系の馬具はほとんどそういう状況で採集されて、神社のほうで保管してあったんです。私どもはあつげにとられて、これはえらいことになったと。金製の指輪が出た、というので是非、発掘しなければいかんという流れになったんです。

（5）5号遺跡（第3次調査）（写真9）

小田：同じようなことで第3次のきっかけになったのは、金銅製の龍頭が発見されたことです。あれは第3次調査でどこをやるかという話が出た時に、たまたまあの当時地下探査機が出始めたころでしてね。出光さんの方が事前にあそこに来て、たまたま電探を使ったら、あの辺でビービー音がしたんで、掘り出して持って帰ったんです。金銅の龍頭が出たということでこれは何としても第3次であそこを掘らなきゃいかんということになりました。沖ノ島というのはどうも不思議と金製品に縁があるところですね。

（6）20号遺跡（第3次調査・写真10）

小田：第1次調査では3回調査をして、第3回は原田大六さんと波多江さんが行っています。その段階では確か16号遺跡くらいまでしか遺跡があることはわかってなかったと思います。その後に第2次の調査で周囲の探索をやって、19号遺跡まで発見されています。第3次調査では23号遺跡までですね。で、14号遺跡と20号遺跡は同じものですから、14号遺跡を最終的には欠番にしているんです。20号遺跡は巨

岩が座っているところから黄金谷のほうまでずっと斜面になっています。この左側が斜面になっていて、この斜面の、外側に須恵器類がだいぶ当時はあったんです。それが斜面の下の方にずれ落ちて。ずれ落ちたものを最初に見つけたものだからそれを14号遺跡にしたわけです。その後20号の調査をやりましたらですね、この斜面の上からずっと滑り落ちているという状態がわかってきて、それで14号遺跡のほうを最終的には欠番にしているんです。

20号遺跡の発掘後の写真ですね（写真10）。右側のほうにずっと斜面が落ちていくところが黄金谷となっているんですね。最初に我々が調査に入ったころまでは、漁師の人たちの中で、「黄金谷には金のチャボがいる」という伝説がありましてね。これはおそらく新羅や加耶の遺物に元があります。我々はよく漁師の人たちから、チャボは見つかりましたかと質問があって、かなり信じられている伝承のようですね。それでこの黄金谷がこれだけ（傾斜が）ありますから、将来、黄金谷のほうに（遺跡が）ずれ落ちていく危険がある。この前、見学に行った時にそういう感じを受けました。

最初に出ていた、望郷の岩だと言っていた社務所前の巨岩（写真4・11）ですね、あの写真の左側は絶壁になっておって、絶壁の部分に確か鉄鉋が入っていた遺跡（正三位社前遺跡）がありましてね。この前私たちが行った時には、あの岸壁が崩れ落ちて、出た遺跡がみんな無くなっていました。だからあの黄金谷とか周囲の崖面なんかにある遺跡もいずれなくなっていくだろうと思います⁽⁴⁾。

（7）三岩礁（小屋島、御門柱、天狗岩）

これはいい写真ですね（写真12）。向こうに小屋島とか三つの島がありまして、最近の世界遺産の時の説明の中に、あれを鳥居に見立ててあの真ん中を通して入ってくるんだという説明がありましたが、あれは今回初めて聞いた話でありまして、我々の時はあの間を通していくようなことはなかったし、漁船でも話は聞かなかったのですよ。今もそうなんでしょう？

岡寺：大島の方に聞き取りをした時、沖ノ島に行くときは必ず船でこの岩礁の間を通るという漁師の方がおりました。第3次調査の概報にも岩礁が沖ノ島の鳥居に見立てられているとの記述があります（宗像大社復興期成会1970）。この写真は昭和29年に撮影されたものですが、恐らくその慣習を意識して撮影されたのではないかと思います（写真13）。

（8）第1次調査の頃の沖ノ島

岡寺：片山写真館を引き継がれている飯田章人さんの話では、第一次調査が行われた昭和29年当時、カラーフィルムは大変高価で貴重なものだったそうですが、調査では多くの写真がカラーで撮られています。出光さんから島内の様子をできるだけ記録として残して欲しいと、お金に糸目をつけずに提供されたと、伺いました。

神宝館に残されていた400枚の写真はほとんどが第1次調査の5月29日、5月30日にかけての2日間のもので。当時、大島の漁師さん達はオリコミと言って毎年10月から4月ぐらいにかけてブリを獲りに沖ノ島を拠点にしていたそうです。

小田：昭和の30年代ぐらいまではまだ内側の小さい堤防しかなかったと思うんです（写真14）。小型の堤防しかなかった。そのあと外側に大型の堤防ができた。内側の堤防は我々が聞いた話では、宗像出身の人が、漁師の人たちが漁をやっている時に台風が来たときにここへ逃げ込むんだけど、それは大変だということでそのために個人で出資したんだという話を聞いていたんです。

テトラポッドを使ってる堤防の方が新しいですよ。手前のあの堤防は我々が調査に行った時には作っていたのだけれども、台風が来ると一晩で全部崩れるんですよ。それで何度も申請してお金をもらってやるもんだから、中央のほうでいくらお金をやっても出来上がらないから、どうもおかしい、現地で汚職しとるのではないかと話が出たという話を当時漁師から聞いていました。古いほうの堤防には、三菱の大きいいわゆるテトラポッドは使ってないですよ。あれを使いだしてから上手くできるようになったという話を聞きましたけどね。



写真16 社務所 (1954.5)



写真17 社務所での打合せ (1954.5)



写真18 沖ノ島の檳榔 (1954.5)



写真19 8号遺跡調査前風景 (1954.5)



写真20 8号遺跡遺物検出状況 (1954.5)



写真21 8号遺跡遺物検出状況 (1954.5)



写真22 8号遺跡調査風景 (1954.5)

最初我々が行った当時、内側の堤防しかなくて、まだおおらかな時代でしたからね、朝あそこの御神水のある所に歯磨きをしたりするのに下りてくるんですけども、あの海岸の水際のところにサザエが上がってきておったんですよ。それを下で七輪を3つ4つ据えといてですね、我々がサザエを捕まえて七輪の上に置いとくと歯磨きが終わったらつば焼きができるといいう、非常にいい時代で。今はそういうの無いでしょう。上がってきたりしませんよね。それで魚とるのもあそこにあるゴムのペラペラしたやつを魚の形に切ってですね、それをつけて釣ってくと捕まるんですよ。そこらへんにこういう魚の形したやつを捨ててありますよね。別にそんなに餌をつけるでもなくいいんだという話をしました。

それから第2次の調査の頃には、港のほうに小屋を作ってそこで寝泊まりして堤防工事をしましたね。6か月くらいで交代するらしいんですよ。ちょうど交代する時期に第2次の調査に行きましてね、工事の人たちと話をする機会もありました（写真15）。

岡寺：こちらは社務所です（写真16）。社務所の前の広場が縄文弥生の遺物の散布地で、現在は崩落により失われています。こちら（写真17）は社務所で打ち合わせされている風景かと思います。

小田：真ん中が出光泰亮さんですね。左側是水野清一さん。

岡寺：写真としては第1次第1回の調査の沖ノ島の島内の様子、沖津宮社殿や自然、特に岩や植物系の写真があります。虫の写真もありました。

小田：アブ。我々が発掘してるときでも昼間はアブにやられるんですよ。岩の根っこのほうまで入り込んでやってますと、夏場ですと汗かくもんでアブがワーンと寄ってきますね。だから調査に入る前は我々は体にフマキラーを撒いていた。そして中にもぐって掘るんですけども、それでもアブが寄ってきますから。そうすると鏡山先生が後ろからハエたたきを持って回ってるという、そういう調査の仕方でしたよ。夜になると今度は蚊が出るんですよ。交代期が朝の6時、7時台と、夕方の6時前後ですか、1時間くらいがアブと蚊の交代期で、何もいな

い時期がありまして。だから夜になると社務所で寝てますと天井にアブがずっとぶら下がっているんです。そして蚊が出てくるんです。今度は朝になるとアブと蚊が交代するんですよ。そういうのが毎日です。それで1週間ぐらい我々が行って叩いてますと、やっぱり減ってくるんですよ。そうすると1週間ぐらいで若いのが出てくるんです、ちっこいやつがですね。そうするとだいたいアブの世代交代が起こったなと。その小さいアブにね刺されるとこれがもう一番痛いんですよ。大きいやつより痛いんですね。今はないんですが、あの当時は下草が生えてましてね、社務所（旧社務所）からずっと上がって行って、（沖津宮）社殿のほうに上がっていくところが、ずうっと草が生い茂っているんですね。その中を上がっていくわけですが、当時我々が穿いているズボンには折り返しがありましてね、ズボンの折り返しの中にあれが、血を吸うやつが。

岡寺：ヒルですか？

小田：ヒルです。ヒルが入っているわけです。そいつが靴下の上から食いついてくるんです。取ると頭だけ残ってる。草の中を歩いてきてズボンを払うとヒルが落ちる。だからアブと蚊とヒルにやられる。僕らの時は沖ノ島の島内は昼でも薄暗い感じだったんですよ。今は（3次調査の時に）かなり周りを伐採してますから。草を刈っているから少ないんですが。今でもヒルは居るんですか？

岡：ヒルはいます。ただ小田先生行かれたところよりは多くないと思います。

小田：あの当時は一木一草も切ってはならんというそういう時期でしたから。で女人禁制ですから、天気予報のこともあって、ラジオでも女性アナウンサーの声が入ると切っていました。

大正か昭和の初めくらいに九州大学の農学部で沖ノ島の植物調査をしていまして、だから天然記念物の指定が早くからできた。檳榔（びんろう）の木が4本あって、それが減っていった私どもの調査の時には1本になっていた（写真18）。遺跡のほうから北側にずっと斜面が下がっていきますね、あの辺の中にあるんですよ。佐藤市五郎さんが、小田さん檳榔の木を見に行きましょうや、と連れて行っても

らったりして。ただ市五郎さんはさすがに10いくつから漁師で鍛えているもんだから、島のヤブの中を走るようにして行くんですね、ついていくのでも大変でした。そういうので檳榔の木を見に連れて行ってもらったのですが、まだ残っていますかね？。

岡：あります、あります。今3本、大きいのがあって、また2本、実生のが。

小田：それでね、大体あれぐらいで、木が大きくなるいんですよね。やっぱり海風に当たるから、立ち枯れみたいな状態になってるので。最初の1回目2回目ぐらいの時にはあの中へ入って行って、手で触ると立ち枯れしてるやつがメリメリと倒れるというような状態だったんですけどね。今はこんな状態はあまり見られなくなったんじゃないですか？

岡：これは台風でやっぱり同じ状況になってるところですね。

小田：韓国でも花崗岩の松の木がいっぱい茂っているところでは、今この写真と同じくらいで、大きくならないんですよ。結局土がないんですねそんなに。沖ノ島でもあまり土がないというので有名で。なんかちょっと掘ったりして土が出ると、佐藤市五郎さんなんかは、「ああ日本の土が出た。」と喜んでましたけどね。

そしてオガチ、この鳥が夜になると帰ってくるんですね。あれは滑走路がないと飛べないそうですね。夕方になると帰ってくるんですよ。それが7号・8号遺跡あたりの遺跡の中にみんな入って寝るわけですよ、夜になるとあの中に入って人間の赤ん坊が泣くように鳴くわけです。我々が発掘した遺物を出土状態のままにしておいておくと、そこに入ってきてワーッと暴れるもんだから、遺物がみんな跳ね飛ばされて翌日大変だったんです。この辺の岩の根っこがオガチの宿になっているんですよ。だから重要なものはその日のうちに写真撮りまでやって持って帰るようにしないと、小さい遺物だったら翌日行ったら跳ね飛ばされているということになります。

(9) 8号遺跡 (写真19-22)

小田：こちらは8号遺跡ですね。

岡：8号遺跡から出土したカットグラス碗片が出土

した場所は分かりますか？

小田：あれはですね、我々も最初ここに入るときは、普通の遺跡と同じように堆積層があってその中に遺物が入っているものだと思っていたのです。ところが第1次第2回調査の時に行って、この遺跡の岩の上に長い間に落ち葉がいっぱいかぶっておりまして。落ち葉をかきのけたら遺物が出てくるという状態なんで。この遺跡は下の方で、オガチもかなり動いておりますから、たぶん遺物がかき回されて上に出てきたんじゃないかという風に観察したわけです。

調査時に台風で居残りになったときに、7号のところにトレンチを入れてみたんです。落ち葉をのけて遺物が出てくるその面の下に、扁平の割石みたいなのが敷いてあったりですね、その下は岩盤なんです。それで落ち葉をかきのけて発見される状態が、当初の状態なんだと、その段階で認識してきたんですね。落ち葉やなんかをかきのけた状態で出てきますからね。正確な出土地点がいまいちおさえられないんですよ。だから図面には書いてないでしょう。

それとマッチ棒、8号遺跡は私と渡辺さんとで担当したんですけど、滑石の小玉などはたくさん散らばって出るんでそれの上にマッチ棒を全部立てたんですね(写真22)、それを翌日行ってみるとオガチがバーッとかきまぜてるという、状態だったんですよ。渡辺正気さんもたばこは吸わないんでマッチをどんどん使ったんですが、たばこ飲む先生たちからはえらい敬遠されてね。マッチがなくなるからええ加減にせえと。それでも渡辺正気さんはせっせとマッチ棒を。終わったときにはたばこ吸う先生たちからは、だいぶ喜ばれたんですけどもね。鏡山先生なんかはたばこ吸っておられたんですけども、沖ノ島の調査の段階で禁煙者になったんですよ。それまではよくたばこを吸っておられたんですけどもね。沖ノ島の調査で2週間もおってたばこ吸わなければ、大体禁煙者になったんじゃないですかね。

岡寺：いい禁煙のきっかけになったんじゃないですかね。

小田：1次調査の時は指輪が出たりしているのですが、1次・2次の報告書では重要な遺物を浮きださせるために細かい情報は省略します、というような



写真23 6号遺跡 (1969)



写真25 17号遺跡 (1954)

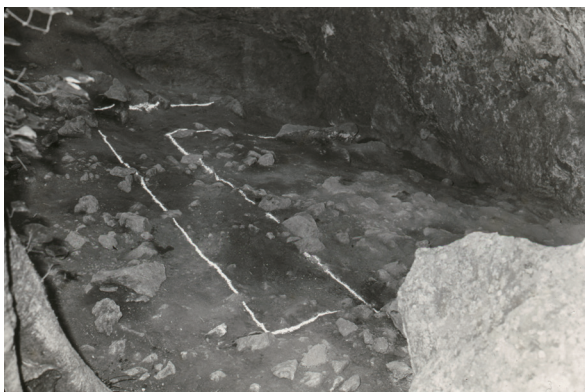


写真24 6号遺跡祭壇状遺構 (1969)



写真26 21号遺跡調査前の写真 (1970.5.8)



写真27 21号遺跡調査後祭壇完掘状況 (1970.5.21)



写真28 21号遺跡復元状況 (1970.5.23)

ことをやっていますから、報告書に出てゐる以外に、本当は原図を見ないとね。

(10) 6号遺跡(写真23・24)

小田：これは6号遺跡ですね(写真23)。この岩の後ろ側がぐっと下がってしまっていて、この後ろ側が5号遺跡になるんですよ。ここでは写真にありますようにね、長方形の溝状に石灰を入れてですね、祭壇の端に石灰を入れて線を引いたんですよ(写真24)。その前にL字型の30cmぐらいの幅の溝が、これが排水溝ですけどもね、それが回って、今の岩の先のところからグーっと下がって5号遺跡の方へ落ちるようになっていっているんです。当時、輪郭を作らせたんですが、報告書の方を見たら入ってないんですよ。私の方でその後、委託研究の時に、ここの溝の状態の、訂正した図面を入れておきました(小田2012)。今から考えたら、石灰をちゃんと入れさせておいてよかった。これは私がぜひ入れとけと入れさせたんですよ。それでこうL字型になってここがグーっと下がってですね、手前か、5号遺跡の方へ落ちていくという仕組みになっているんです。

岩陰遺跡は上の巨岩の一番先端の輪郭である雨落ち線が、だいたいこの祭壇のすぐ外側にくる仕組みになっておるんです。だから雨落ち線より内側の部分が祭壇になるわけです。この第3次調査の6号遺跡についてはこの前、委託研究でもう一度訂正した図面を載せていますから、そちらのほうを見ていただきたいと思います(小田2012)。

(11) 17号遺跡(写真25)

小田：I号巨岩、一番古い段階の祭祀ですね。一番高いところが確か宗像神社の人たちが「高天原」と呼んでいたところになるんですけどね。

岩の累々としていところ、1番上が18号遺跡、その下の岩陰のところは17号遺跡(写真25)、4世紀から5世紀にかけての沖ノ島のいちばん古い段階のところですね、これは報告書の段階ではこのへんからはっきり書いてないんですよ。やはりこの段階から巨岩の上にも小さな祭壇を作っているんです。遺物が出るその下に割石があるんです。そういう簡

単な祭壇を作っているの、遺物が出てくると合わせて輪郭をとると、だいたい長方形になって、それの大きいのが後の岩陰の段階になってくると思うんですけども。その辺のところも私の委託研究のほうでは新しく書いておきました(小田2011ほか)。

古い段階のものは、祭壇の上に遺物を並べてですね、さらにその上を小さい石で覆い被せてしまうというやり方です。そういうのを報告書にははっきり書いてなかったんじゃないかと思うんですけど、今風に言えば、簡単な祭壇を作ってその上奉獻品を並べて、そこでお祀りが終われば、それが見えないように石でそれを覆って隠してしまうというやり方ですね。これが岩上祭祀の場合も同じことをやっているわけですね。

17号遺跡の場合、21面の鏡がまとめて押し込んであって、その下に、鉄刀などを並べてあって、そしてこういう風に見える外側からさらにもう一度、中ぐらいの石を上から立てかけて隠してあるという、そういう状態です(写真25)。

この祭壇を作って遺物をその上に並べてというのは、21号遺跡という岩上祭祀の最後ではもうそれをやらないですね。一番高いところにあるからまず人の目に触れなかったためか、その段階では遺物の上にさらにもう一度石を被せるということはやらないんですよ。露出したままで置いているんです。それがさらにそのまま下に下ってくると、岩陰遺跡の状態になるということなんですね。

(12) 21号遺跡(写真26-28)

小田：21号遺跡は、祭壇の隅に大きな石を置くという、右側ですね、岩がちょうどぐーっと下がってますから、どうしてもこちらに下がってくるんです、一番下がってくる隅のところに大きな石を置いているわけですね。そして真ん中にも石を据えています。この写真は復元した状態です(写真28)。

それでもう一つは祭壇の真ん中にやや大きめの石を一つ置いて、あの石の高いところに小さい穴がいくつか開いていて、その穴の中に、滑石の白玉が2〜3入ってしまっていて。そうすると多分真ん中の石の前で、榊か何かを立てて、それに白玉をぶら下げてお

いて、ひもが切れるかなどで穴の中に入りこんだんだろうということを想像しておるところです。

そういうことでこちらから見ると梯子のかかっている下の段の一番上の向こう側の高い段の斜めになっているところです。確かその高低差が50～60cmあったと思うんです。そういうところで水平面、平坦面を作るためにあのような祭壇を新たに作ったんですね。でこれがちょうど5世紀の中頃前後ぐらいになるんですね。巨岩の下部分はきれいに残っていたんで、この輪郭が割り出せたんです。巨岩の低いほうにはずっと切り込んだ線が残ってしまっていてね、その所に小さい石が二～三段ずつ積んだ状態がずっと残っていたんです。その上にのせて復元したわけなんです。

福嶋：復元の時に使った石というのは遺跡の周辺にあったものですか？

小田：復元に使った石は下から持ってきたんじゃないくて、巨岩上の低いほうにたまってたものだと思います。低い方は地上から3mほどありまして、高いほうは下から7～8mありまして、下は良く残っていますからね、低い方は、四隅のところに大きな石がありますが、あのそばに50cm幅ほどか、並行した石敷きがずっと出ているんです。多分そこが正面だと思うんですが。3mのそこからずっと上がってくるんですが。

低いほうの四隅に大きな石をやるというのは慶州あたりの古墳でもやっているんですよ、低い方が一番ズレやすいんです、そういうところに大きな石を置くのは、たぶん新羅の古墳の影響だと思うんです。

そして一番外側に50cmくらいの石敷きの幅がずっと出たんです。これは低い方はよく残っていたんです。で、そちらから上がってきて、幅50cmのところは正面だと思うんです。これが新羅でも大邱あたりの古墳の前面にね、石敷きを置きます。最近では大きい祭祀遺跡でも石敷きが出てしまっていてね。こういう作り方のよりどころは新羅の慶州あたりや加耶あたりから出てくる古墳の作り方の技術をかなり導入しているんじゃないかなと思うんですけどね。

岡寺：もし下から人が祭祀の為に巨岩に上がってくるとしたら・・・

小田：左のほうですね。左側のほうにごろごろ石があって、割と上がってこられるんですよ。あそこしか上がってくる道はないですね。そしてちょうど手前に角の所に大きい石が置いてある、あの部分の左側にかけてのあそこに幅50cmくらいの石敷きの面がずっと出ている。だから左側のほうから上がってきて、手前のほうが正面になると思いますけどもね。

21号遺跡から、岩陰遺跡がでてくるまでのところにブランクがずっとあるんですよ。あとはわりとつながるんですけども、沖ノ島の中ではそこがね。この後、岩陰が出てくるまでがブランクになって、半世紀近く。ちょうど雄略前後、大和の政権が一番弱ってくる時期でしょう。そういう意味では、今のところその時期の遺跡がないんですよ。

そしてこの後に、岩陰遺跡が出てきますのでね、ちょうど雄略の時期は、政権が弱っている時期と言われますけれども、そこら辺と重なっていくのではないかなと思っています。未発掘のところでその時期が埋まるのではないかなと思うんですが、7・8号遺跡みたいなあんな大掛かりなものはどうもなさそうだなという感じです。

それともう一つ申し上げますけれども、沖ノ島の当初の段階での遺跡の認定などにしても、将来きちんと調査する時期があれば、そこで整理してもいいと思います。欠番にしなければいかんようなことがありうるだろうから。20号遺跡と14号遺跡のように、どこかで欠番にしないといけないような状態も起こりうるんじゃないかなと思っています。

(13) 1号遺跡

小田：1号の場合は露天です、遺物がザーッと落ちたような状態が10m四方におよんでいる（写真29）。地形が傾斜してますからね、低い方については石を積んで、ぐり石である程度平坦面を作っています。

1号遺跡は全体を完全に発掘したわけじゃないんですよ。土器の出方がいちめんに出てくる状態を図面に描いてみると、また下からも出てくる。そこで図面を描くとまた下に出る。だから低いところで見るとかなりの厚さになってくるんですよ。どうも1回限りの祭祀ではなさそうだと。ある時期には土器類を



写真29 1号遺跡土器検出状況（1971）



写真30 1号遺跡大石検出状況（1971）

まとめて持って来てる、ただ捨てるんだったらなんで祭壇みたいなものを作るんだと。最後の状態は捨て場ですね。最初はきちんとしたものを作ってるんだから、祭壇というのがあって祭祀の遺跡だと。のちになるとあそこへもって行って捨て場にする、と。祭祀遺跡から祭祀遺物の処理場へという考え方になっているんですね。最初は露天祭祀だろうと。そしてその後には土器の処理場になっていったんだろうと。

あれは全部捨て場だと決めつける説と、そうでなくあれは最初は祭祀をした場所だという考えと両方で、結論は出てないんですよ。しかし実際にあれだけちゃんとした祭壇を作っているということは、捨て場に何で祭壇がいるんだということになりますからね。だから、最初は露天祭祀の段階であって、それからのはには集積したものの捨て場になっていくと考えた方がいいんじゃないかと。

それともう一つは大島の御嶽山祭祀遺跡の場合も、祭祀をやった場所なら大甕を据えてるはずで

す。甕がそこら中から出たからですね。調査していた人に確かめてほしいと言っておいたのですが、やはり大甕は地面に据えられていた状態だったと聞きました⁽⁵⁾。そうするとやはり5号遺跡のように甕を地面に据えて、祭祀に使ったんだと。出てくる遺物も大体5号遺跡の時期で出ますからね、その時期に祭祀がはじまったと。

世界遺産になる時も、三社（宗像大社沖津宮・中津宮・辺津宮の三宮）成立の話が出たと聞いています。少なくとも7世紀には沖ノ島、大島に祭祀遺跡があるということで、三社成立の話は7世紀までさかのぼらせてもいいんじゃないかという結論になってくるわけです。世界遺産も三社まで認めておるわけでしょう？世界遺産の判定はヨーロッパの人たちが多ければ、おそらく古代の祭祀について、なかなか理解ができないだろうと思いますよ。それもあつたんで、私は大島の御嶽山遺跡の名前を世界遺産にきちんと挙げておくべきだと思います。三社の説明をするときに、欠かせない遺跡だと思うんですけどね。

岡寺：御嶽山祭祀遺跡は、中津宮の一部分として世界遺産に登録されています。

小田：1号遺跡は、遺物が散らばっている範囲を見ると大体10m四方くらいの範囲の中で納まると思います。そういう認識のもとで中にトレンチを一本入れたんだけどあまりにも遺物の包含層があって、取っても取っても出てくる状態なので、最初は半分くらい掘る予定だったんだけど、そこまでやる余裕がなかったんです。だから、ある程度の調査で状況を確認して、こういう状態で残っているということがわかってきました。最初はわからないもんだから、この中に入っていくとバリバリバリ音がして、須恵器なんか踏み割られるんですよ。

これは隅のところの大石ですね（写真30）。やっぱり祭壇の隅に大きな石を置くようにしているんですね。この大きな石の下の方のところに、ぐり石で固めた平坦面があって。

『沖ノ島』『続 沖ノ島』の段階で書いてるのは、国家祭祀というのは鏡がたくさん出たり、そういう状態。その後、そういうものがなくなってくると、

これは民間祭祀になったんだと考えていて。豪華な古墳時代の新羅のものや馬具や鏡がたくさん出たりすると、国家祭祀であると。しかし、そういうものがなくなってくると、これは地元でやった民間祭祀になってるんだという考え方で。

その辺で律令祭祀という考えをはっきり打ち出したのが井上光貞さんでしてね、井上さんは、神道祭祀については何とかしなきゃいかんと。結局、東大の最終講義の時に沖ノ島祭祀をやってるわけですよ（井上1984）。そして井上さんのところで初めて律令祭祀というのを打ち出してきて、それにあたるのがだいたい岩陰遺跡の後半、半岩陰・半露天祭祀という時期ですね。あの時期は完全に律令祭祀でその上に遺物がいっぱい出てくるでしょう？あの時期で律令祭祀の方式が決まってくるわけですよ。

そういう発想が、1次・2次にはなかったもんだから。『沖ノ島』『続 沖ノ島』では、その辺のところをのみこんだうえで報告書を読まないといけません。当時の学問的な考え方を押さえないと、こういう研究というのは日進月歩で進んでいくわけですから。それから当時、神道考古学というのは地方にまではなじんでいなかった時期ですからね。当時は大体常識というのがそういうもんだったと、ある程度こちらののみこんだうえでこの報告書を読まないといけないわけですよ。

そうするとこれが40年たって『宗像・沖ノ島』が出た段階ではある程度「神道祭祀」とか「律令祭祀」という考え方が入り込んでいる時期ですから、最初の2冊の段階から、書く人自身の神道考古学に対する認識も違ってきている。だから当然、学問の世界での進展なり認識の違いもあるんだということをのみこんだ上で読んでいかないと。

大場磐雄先生は石田茂作先生の仏教考古学に対しては一種のライバル意識を持っていて、亡くなる前に『神道考古学講座』を6巻もくろんだでしょ。あの時考古学協会の若い人たち、我々も呼び集められてね。『仏教考古学講座』はあるけれども神道考古学はないので作らなければいかんので、皆さんよろしく頼むと言って始まったわけですよ。大場先生は第6巻目が出るころに亡くなられたんですか

ね。そういうのが（沖ノ島の）1次・2次と3次の間に入ってくるわけです。そういう学会の動きなどもある程度知ったうえで読むと、理解度も違ってくると思うんですけどね。

私自身が委託研究に入ったのは、当時としてはそうではなかったんだよという、また、その後の認識は我々としてはこうだよ、という説明を今のうちにやっとなないと、もう生き残りは私一人ですから、早く亡くなった先生たちに申しわけない（小田2011、2012、2013、2020）。生き残りとしては、今回のような委託研究の形で、現在の神道考古学の考えにおつきあいをするとなれば、また新しい進展ができますよということがやっておきたいことなんです。

（14）戦争遺跡

小田：また、だんだんと戦争遺跡の研究がこのところ盛んになってきてますんでね、おそらく戦争遺跡の関係にここもかぶってくるんじゃないかと。砲台の跡もそうだし、岩盤をくりぬいた弾薬庫もありますよね。今、登ってる登山道、あれを造ったのは軍隊なんです。軍隊が作った道ですから、今だったら大変なお金がかかるんじゃないかと思います。あれで灯台まで上がるような道ができたんです。それがいまだに機能している。だから当時の軍隊というのは大変な仕事をしてましてね。私、朝日のセスナで雲南に行ったことがあるんですけども、雲南に行ったときに一番端っこの方は昔のビルマに近いところです、あの辺は確か久留米の方の軍隊が行って造った鉄道がありますよ。ミャンマー鉄道があるでしょう。戦争遺跡がまたいずれかかわってくるんじゃないかと思っています。

岡寺：そろそろ時間になりました。それでは、本日はこれで終了させていただきたいと思います。小田先生、長時間にわたり、本当に大変ありがとうございました。

（一同：ありがとうございました）

謝辞

本稿は令和元年から2年度の文化庁文化遺産総合活用事業で実施したデジタル・アーカイブ事業の成

果によるものである。本調査にあたっては、宗像大社、片山写真館はじめ長期にわたり多くの方々にご協力頂きました。記して感謝申し上げます。伊崎俊秋、飯田章人、飯田美智子、魚里洋一、岡 崇、岡部るい、小田富士雄、片山敬子、原俊一、福嶋真貴子、松川博一、松本将一郎

註

- (1) 本稿掲載写真のうち、第1次・第2次調査にかかる写真（写真3～8、11～22、25）は片山撰三写真撮影、第3次調査は松見守道、阿久井長則が撮影（写真9・10、23・24、26～30）。また掲載写真の一部は、世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群のデジタル・アーカイブであるMUNAKATA ARCHIVESの写真データベースで公開されている。<https://www.munakata-archives.asia/>
また本調査をもとに制作された動画「WHY OKINOSHIMA? Episode 1: Why is Okinoshima the island where the gods dwell?」が本遺産群の公式YouTubeチャンネルで公開されている。
なお、写真4・5のイラストはいずれも画像生成AI（Firefly）で作成。
- (2) 沖ノ島を発掘調査するに至るまでの経緯は、武藤正行1993『海の正倉院』に詳しい。
- (3) 第1次・第2次調査時の社務所と第3次調査時の社務所は別の建物、立地も異なる。本稿の「社務所」は第3次調査での「旧社務所」を指す。
- (4) 「正三位社前遺跡」は昭和47年（1972）の豪雨による土砂崩れにより消滅（宗像市・宗像大社2022、宗像大社1973社報『宗像』第150号昭和48年6月）。宗像市岡氏のご教示による。
- (5) 宗像市教育委員会2012『大島御嶽山遺跡』宗像市文化財調査報告書、第64集

参考文献

井上光貞1984『日本古代の王権と祭祀』東京大学出版会
小田富士雄編1988『古代を考える 沖ノ島と古代祭祀』吉川弘文館
小田富士雄2011「沖ノ島祭祀遺跡の再検討 ―4～5世紀宗像地方との関連で―」『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」

研究報告Ⅰ』、2020『古代九州と東アジアⅢ』再録
小田富士雄2012「沖ノ島祭祀遺跡の再検討2」『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告Ⅱ』、2020『古代九州と東アジアⅢ』再録
小田富士雄2013「沖ノ島祭祀遺跡の再検討3」『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告Ⅲ』、2020『古代九州と東アジアⅢ』再録
小田富士雄2020「沖ノ島祭祀遺跡の再検討4」『古代九州と東アジアⅢ』同成社、2020『古代九州と東アジアⅢ』再録
小田富士雄2020『古代九州と東アジアⅢ』
小田富士雄2025「沖ノ島祭祀遺跡調査関係資料拾遺」『古文化談叢』九州古文化研究会
岡寺未幾 2020「「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群に関わる調査研究事業 二〇一九年度調査概要 四（三）片山写真館所蔵「宗像大社関連写真」について」『沖ノ島研究』第6号「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会
岡寺未幾 2021「沖ノ島21号遺跡についての再検討（予察）―記録写真の分析から―」『沖ノ島研究』第7号「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会
武藤正行1993『海の正倉院沖ノ島：よみがえる建国の神々』世界日報社
宗像市教育委員会2012『大島御嶽山遺跡』宗像市文化財調査報告書、第64集
宗像市教育委員会・宗像大社 2022『国指定史跡「宗像神社境内」保存活用計画 本編』
宗像神社復興期成会1958『沖ノ島 宗像神社沖津宮祭祀遺跡』
宗像神社復興期成会1969『続 沖ノ島 宗像神社沖津宮祭祀遺跡』
宗像神社復興期成会1970『沖ノ島 1 宗像神社沖津宮祭祀遺跡昭和44年度調査概報』
宗像神社復興期成会1971『沖ノ島 2 宗像神社沖津宮祭祀遺跡昭和45年度調査概報』
宗像大社復興期成会1979『宗像 沖ノ島』吉川弘文館

本誌のデータは、本遺産群のデジタル・アーカイブ
「MUNAKATA ARCHIVES」の「宗像研究文献」より
閲覧・ダウンロードできます。
<https://www.munakata-archives.asia/>

沖ノ島研究 第12号

令和8(2026)年7月発行

発行：「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会
(事務局：福岡県市町村・地域振興部文化局九博・世界遺産・文化施設課)
〒812-8577 福岡県福岡市博多区東公園7番7号

ISBN 978-4-9913533-5-2